

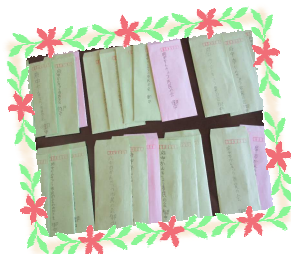
府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会会報
 2018年 秋号 10月10日発行 通巻70号
 発行人 小西 信生 (府中市四谷6-19-20)
 TEL 042-405-8524
 編集人 葛西 利武

府中第五小学校
 3年生109人

西府崖線／環境学習へのお礼の手紙

第2回環境学習(フィールドワークの部)が、6月18日(月)10:35～12:00に開催された。昨年は10月5日(木)の開催であった。総児童111人中、109人が参加。グループを「樹木」、「野草」、「昆虫」の3班にわけ、13人の講師が引率した。天候は曇り、一時霧雨。その後、7月17日に五小児童109人からお礼の手紙があった。児童の手紙は原文のままとし、紙幅の都合により各班2通の計6通とした。掲載文をパソコン入力し、氏名は省略した。(編集部)



児童からの手紙



樹木班:左の青シャツは、遠藤講師(森林インストラクター)。右端は見守り役PTAの熊崎さん。右から2人目は大西先生。中央背中は三才撮影の渡辺さん

<昆虫班> (42通)

★あつい日がつづきますが、お元気ですか。総合の学習でお世話になりました。

この間は、分からなかった昆虫を教えてくれて、ありがとうございました。カマキリやカミキリやカノコガを見つけて、これは、カノコガのさなぎだよと教えてくれて本当にありがとうございました。二学期もよろしくおねがいします。

★つゆがあけて、夏になりましたがお元気ですか。自然たんけんでお世話になりました。

自然たんけんではわからないことをおしえてくれてほんとうにありがとうございました。クモのおびきよせかたなどを教えてくれてありがとうございます。

二学期もよろしくおねがいします。

<樹木班> (32通)

★海に入ると気持ちいい時季になりましたが、お元気ですか。六月に自ぜんたんけんでお世話になりました。

この間は樹木でネムノキやモミジの細かいとくちょうまで教えてくださいましてありがとうございます。イロハモミジやカエデなどはじめて知ったことがたくさんありました。おかげできょうみを持ちました。

これからもねっちゅうしょうたいさくをして、地いきのことをいろいろな人につたえてください。さようなら。

★このごろセミもないてあついですが、お元気ですか。総合の時間に樹木のお話をうかがいました。

この間、ハケのことや樹木のことをおしえていただき、ありがとうございました。ヤマモモやカツラなどまだそのときは、しらなかった木をおしえていただきありがとうございました。とてもべんきょうになりました。

二学期また会えるのを楽しみにしています。



昆虫班がフィールドワークを終えて帰校。左から高家、五十嵐、鈴木、栗倉、倉町、浅田、1人おいて右端の植松が各講師。右から2人目は神尾先生。校庭にある樹齢106年のクスノキの前にて

<野草班> (35通)

★夏になりとてもあつい日がつづきますがお元気ですか。この前自然たんけんでお世話になりました。

この前の自然たんけんでおいそがしいなか色々なことを教えてくださいましてありがとうございます。たとえば野草の色々なくみや色々な野草の名前、野草のつかい方や野草のちがいのなどお教えてくれました。

秋の自然たんけんもどうぞよろしくおねがいします。

★さいきん三十どより高い気温の日がつづきますがお元気ですか。自ぜんたんけんでお世話になりました。

この間はヒルガオやネジバナなどあまり知らないお花の名前を色々おしえてくれてありがとうございます。これからもお体に気をつけて、おしごとをがんばってください。



6月4日のオリエンテーション(事前学習)講師(中央奥)／体育館にて

レジメ中心に報告

第8回わき水まつり(パート1)講演会を傾聴して

第8回わき水まつり講演会が以下の要領で開催された。

日 時	7月8日(日) 13:30~15:30
会 場	府中市市民活動センター「プラッツ」6階 第2会議室
演 題	府中崖線とわき水(その特性と歴史) —美しく個性的な日本の国土の賢い利用へ—
講 師	千賀裕太郎氏 東京農工大学名誉教授(農学博士) 府中市緑の基本計画検討協議会会長 農林水産杯(天皇杯等)中央審査委員会会長
参加者	50人
懇親会	18人(講演会終了後自由参加 15:45~16:45)



近時、講演会においてパワーポイントを使用することが多いが、今回はレジメをもとにした千賀講師(写真)のお話だった。レジメはA4判6ページ、0番~9番の番号が付き、番号にはそれぞれ小見出しがついていた。ここでは筆者が特に印象深かった0、1、2、3、4、6、9番を引用し、引用するにあたっては若干の編集を行った。

0 私たち日本人の「国土」観・「産業」観

講師は「団塊の世代(1947年~49年)」であるが、当時の義務教育の在り方に強い疑問を呈していた。当時の主流は、「日本は国土も狭く、鉱物資源にも乏しく、地味も貧弱のため様々なものを輸入に頼り、いわゆる「加工貿易」を中心とした近代的な経済発展に全力を注ぐべきだ」という論である。

しかしながら、日本列島はとても豊かな土壌が常に補充され(火山由来の土壌なのでミネラル豊か)、気候(気温、降雨)にも恵まれて、農林業の条件に優れ、また暖流・寒流の交差する豊かな海域に囲まれていて水産業も盛んで、第一次産業(農林水産業)の条件は、他国に比べて圧倒的に恵まれた国土である。

1 幕末の日本人は外国人にどう見られていたか

ご当地東京の「府中」は、広大かつ豊かな武蔵野台地の南部に位置し、古代には武蔵國の国府が置かれた。さらに関東一円の総社「大國魂神社」の存在を勘案すると、この府中地域の安定した豊かさ(食糧・文化を基盤に)を象徴している。

府中には、古多摩川が形成した洪積台地(と「崖線」)が存在し、台地の主に上面は畑地として使われ、また台地崖線の下部の湧水が、弥生時代には水田稲作を可能にしていた。この地域での人の居住は、古く縄文時代にまでさかのぼる。 ※外国人の話は省略

2 美しく豊かな日本の「国土」、キーワードは「微地形」

日本列島上の火山活動によって、「褶曲」等による国土

の「微地形」の発達があった。ミネラル豊かな火山性噴火物による堆積土壌(黒ボク)を主力とした、豊かな「表土」の存在。降雨・河川流水による「水食」作用による「微地形」の発達。「微地形」とは、100m以下の高低差程度の細やかな地形のこと。

この「微地形」は、まだ人間による社会的生産力の低い古代においても、田や畑、水路や道路の造成とその利用を可能にしたという意味で、「大陸の大平野地域」よりも歴史的には早い時期に、あちこちで水田耕作が順次開始された重要な条件だったと言えるだろう。

ドイツでは最終氷期(7~1万年前)の終了後、地球の温暖化によって、それまでアルプス山脈などを厚く覆っていた「氷河」が次第に融けながらドイツの平地を北上し、やがて北海にまで移動したときに、「表土」(土地の表面を覆う養分豊かな土壌)が「氷河」にすっかり剥ぎ取られて押し流され、北海に捨てられたのだ。

そのため、ドイツ等欧州の表土はとても薄くこのため土地は作物にとつて必ずしも豊かとはいえず、表土のことを「ムッター(母)ボーデン(土)」と呼び、とても大事にしている。

3 日本の文化—豊かな自然と「農」の展開に支えられて



質問する参加者

“自然”を背景にして“四季の行事・文化・労働、家族間の交流”を歌うものがとても多い。

たとえば、唱歌「春の小川」(大正元年)はどんな川だろう? 皆で歌えばわかる! 歌詞がとても“写實的”だから!

#ここに「春の小川」の歌詞が記載されているが省略 b

答えは「農業用水路」! 私も子どものころ、水田の用水路で、コブナやメダカを取ったりして、よく遊んだ。私の感性を柔らかく育ててくれた、得がたい場所である。

4 人手を入れてマイルドにした日本の「自然」

古代から日本列島の急傾斜の地表の「水」のスピードを“遅く”へと制御。河川に堰を造り水を安全に陸地に導く。「水を横向きに」(用水として)流し、また水を地下に導いて「水を縦向きに」流す(地下水補給)ことも行われた。土地利用計画として、数10センチの高低差を読んで洪水等避災を基本に。厚い暴風林、防水林、防雪林、防潮林などの設置。「大陸」には



展示パネルを見学する参加者

「大陸」には

ない、「中緯度モンスーンに位置する日本列島」の比較的マイルドな自然(風、水)の恵み!と言うべきか。

6 こうして田んぼや雑木林に育てられてきた「生き物」と「日本人」・「私たち人間には絶対に必要な“育ちの環境”!

幼児から大人まで、夫々の成長期に、田んぼ・雑木林・原っぱ等との夫々の関り方が「必須」である。「必須」の意味は、乳幼児期(3歳頃まで)には、子どもの脳に「基本ソフト(OS)」が形成される。その頃の乳児の「育ちの空間」が決定的に重要。論理的な思考が可能な脳に育つか否かの重要な時だ。TV、パソコン・ケタイ漬けは、もつての外、くれぐれも気をつけたほうがよい。論理性に乏しい脳になる可能性大である。

9 私の提案→危険な太平洋沿海部に集中展開する「人口・経済(都市)集積帯」の、内陸部への移動をできるだけ早急に(10年)!

近い将来(30年以内に確率80%＝本当に“確実”という意味!),太平洋沿岸地域を中心に日本を襲うに違いない

“巨大地震”。現在、日本の太平洋沿岸部はオーバーユース(過剰利用)。このままでは、巨大地震で日本の都市産業集積は壊滅。すなわち「日本沈没」! さあ、どうする?!

→→内陸部への産業・経済・人口分布・土地利用の変更を速やかに。内陸では今から食糧生産と再生可能エネルギー生産を2本の柱の経済に特化!! しかも、これは“均衡の取れた国土利用”実現の契機にもなる。そうなると、現在は静かな内陸部の農村地域も、これからは忙しくなる。

<筆者感想>

講師の幼少期における自然とのかかわり、日本特有の微地形と自然、歴史への踏み込み、(唱歌)春の小川、日本人の特性等にも触れている。また、近い将来の巨大地震への対策として、「人口・経済(都市)集積帯」の内陸部への移動など、深い洞察力に富んだお話であった。「府中崖線とわき水」という地域的な主題から、ここまで「展開」したお話をしていただいた。(葛西利武)

7月21日
22日

わき水まつり(パート2)用水の魚探検隊



東京農工大生 近藤雅人さん
春稿(ⓐ近藤さん ⓑ大平さん/あずま屋前にて)

2018年7月21日に開催された第8回わき水まつりに、大平さんの後輩として参加させていただきました。当日は10時の時

点で手元の温度計が32.2℃を知らせ、午後には予定の「はかせと歩く生き物探検隊」高家博士担当分を中止にするなど厳しい日差しと暑さでしたが、小学生6名ほどが参加してくれました。ちなみに、翌日も午後は中止と聞きました。

集合場所のあずま屋から少し先にある府中用水の下流部にて手網を使って“ガサガサ”の要領で魚獲りを始めました。熱中症を防ぐため、なるべく日陰になっている所を探し、まずは“ガサガサ”のやり方から教えることとなりました。途中、近所の親子も参加し、30分ほどガサガサしましたが、当日は流れが速く、日陰になっている所には水草などの魚が隠れていそうな要素が少なかったこともあり、小学生にはなかなか難しい条件だったかもしれません。

特に低学年の子は、少し足を滑らせるとそのまま流されてしまうのではないかと思ひ、内心ハラハラしていました。それでも、下流に網だけ固定してもらい、大人が上流で魚を追い立てるなど、二人一組で役割を分担してガサガサを行う工夫や、週一でガサガサに来ているという親子のアドバイスもあって、無事に生き物を捕獲することができました。



みんなでガサガサ/府中用水

なかでもナマズは小学生だけでなく、大人にも大人気でした。私も研究室の調査で府中用水にて魚を獲っていますが、今年はいつよりもナマズが多く獲れている気がします。今回は全長13cmの今年生まれた赤ちゃんナマズが獲れました。成長すると60cmにもなるナマズが、府中用水のあちこちで見られる日がくるのかもしれませんが。

あずま屋に戻ってからは、観察用水槽に魚を振り分け、大平さんの解説を聞く時間となりました。あまり時間を長くはとれませんでした。小学生は熱心に聞いてくれていたように思います。なかには魚に詳しい子もあり、個人的にも楽しい時間をすごすことができました。虫や魚になかなか触れない、いわゆる「都会っ子」の面影を感じさせない彼らを見て、なぜか安心しました。

大平さんの楽しいお話/あずま屋



個人的に少し気になったのは、ザリガニの多さです。あずま屋近くのちょっとした場所に、恐らく100匹以上はいたのではないのでしょうか。アメリカザリガニは環境省の緊急対策外来種に指定されており、積極的な防除が必要です。すでに身近な生き物としての地位を確立しており、生き物を観察する場で駆除の話はしづらいです。

しかしここで大人が諦めてしまうと、外来生物問題の解決は遠ざかってしまうように思われるので、何らかの形でアメリカザリガニを始めとした外来生物に対する問題意識を小学生にも持ってもらい、実際に自分たちもできることがあるのかを考える場を設けられたらよいのかもしれませんが。

今回のわき水まつりに参加させていただき、教職課程の履修者としても大変有意義な時間を過ごすことができました。また機会がありましたら、お手伝いさせていただきます。

☆東京農工大学 農学部
地域生態システム学科4年 近藤 雅人

府中環境まつり

2018

6月2日(土)快晴の下で府中環境まつりが府中公園で開催されました。今年のテーマは、「楽しく学んでCO2(コツ)CO2(コツ)減らそうCO2(にさんかたんそ)」です。



当会のブースでプラトンボ、バッタづくり等を楽しみます

出展社数は38団体、フリーマーケット数は100店前後、ステージ出演者数は5団体です。開幕は10時ですが会場準備は8時前から始まります。出展社の展示物搬入は各団体毎に4グループに分かれ、車が渋滞することなく効率よく会場に入場、搬入します。フリーマーケット出店者は公園南噴水周辺に所狭しと店を広げ、品物の配列に大忙しです。当かんきょう市民の会は8時30分に展示物を搬入、9時関係者の集合を待って、仕切りボード設置、机、いすの配置、展示物の展示準備です。

隣のブースは元・現かんきょう市民の会会員が参加している市民酸性雨調査の会、トランジションタウン府中でお互いに挨拶を交わしながらブースの準備です。皆さん環境への取り組みに意欲的です。当会はかんきょう市民の会紹介パネル、西府崖線保全活動パネルの展示、プラトンボ、バッタ作り、チョウ飛行機の体験コーナー、クイズラリーへの参加を通して環境保全への当会の取り組みを紹介します。

10時ステージで開会宣言。開幕と同時にクイズラリー目当ての来場者がスタンプ用紙を片手に来店します。クイズ

に答えてスタンプを押印すると、展示物を見るでもなく、プラトンボ等の体験をするでもなく次のクイズラリー会場へ急ぎます。

クイズラリー目当ての一波が過ぎると、体験目的の親子連れが増えてきます。ブース前でプラトンボ、バッタ、チョウ飛行機で来場者にアピールします。プラトンボの華麗な飛び、バッタの精巧さに声があがり、プラトンボ作成、バッタ作りも徐々に増えてきます。小学生低学年はプラトンボ作成、高学年、大人はバッタ作り、幼児はモンシロチョウを呼ぶ白い紙チョウチョを片手に喜びます。

JCOMの取材があり(※⑩に2枚のTV画面の写真)、展示パネル、バッタ作りを熱心に撮影していました。ステージではエコレンジャーショー、篠笛・オカリナ・箏の演奏、子どもリサイクルみこし等が演じられます。去年は展示場所がステージ前だったので観覧できましたが、今年は場所が遠くかつ忙しく見られませんでした。

日中はさらに暑くなり、日陰のテント内も両サイドに別ブースがあり、風が流れず暑い一日になります。暑いなかでも子供たちは元気です。大きな掛け声をだしながら会場内を子どもリサイクルみこしで練り歩きをし、元気をくれます。

午後1時過ぎには来店者も少なくなり、午後3時に閉会宣言です。来店者数は244名と大幅に増えました(午前162名、午後82名/子ども128名、大人116名)。ちなみに去年は150名です。全体では昨年実績の19000人を少し上回ったようです。

(柿本 正夫)



6月6日JCOMデイリーニュース(番組名)で環境まつりが取り上げられ、当会の活動も来年20周年を迎える環境団体として取り上げられました。放送時間は20秒強、竹内さんが「田んぼの学校」の活動を説明した画面が流れました(右側) =小西信生撮影

クール・エコの集い

7月20日(金)午後3時から約1時間、ふちゅこまーけっと(大國魂神社大鳥居前)にて開催(⑪写真)。今年とは昨年までの一部協賛企業の撤退もあり、フォーリス前での開催から、場所も変更し、フラダンスやゆかたショーなどもやめて、打ち水中心で行ないました。主催は環境保全活動センター。



20日当日は最高気温が気象庁公表値(府中市東京農工大学内)で、34.2℃を記録し、打ち水まつり開催中も33℃前後でした。会場は旧甲州街道とけやき並木通りの交差点でしたから、猛暑の中での開催となり、打ち水で多少まわりの気温が下がった効果(概ね2℃程度)がありました。

当日は大國魂神社のすもも祭の開催時間でもありましたので、300人ほどの市民の方の参加もあり、ゆかたで参加された方もいらっしゃいました。

7-8月の異常気象(追記)

「今年の夏は暑かった!」、府中市の気温情報をもても最高気温が35℃以上になった日は16日と、昨年(2017年)の3日を大きく上回っています。

7~8月の間に熱中症で救急車搬送された人数は、全国で8万人を超えており、昨年までの5万人前後をこの2か月だけで大きく上回っており、亡くなった人もかなりの人数になると懸念されています。

暑かったことの副産物として、台風が多かったこともあげられます。地上が暑かった理由または原因として、海も暑かったことが、台風が多くなる理由となります。平年の台風の数(発生数)は年間26個程度とのことですが、今年は8月31日までに、21個発生しています。

西日本では、台風、梅雨によるものではありませんが7月初旬の梅雨明け後にもかかわらず、広島県、岡山県、愛媛県を中心に豪雨災害が発生し、洪水や土砂崩れなどによって、死者・行方不明230人の被害が発生しています。

このことは、地球温暖化と無関係とは言いがたく、私たちは今後とも厳しく観ていく必要があるでしょう。(小西 信生)

Eco Products 2017 リポート

国連 SDGs…持続可能な開発目標

第19回エコプロダクツ「環境とエネルギーの未来展」が昨年12月7日～9日の3日間、東京ビッグサイトにて開催された。この通称エコプロは、アジアを代表する環境・エネルギーの総合展である。

SDGs(*1)が大切にする「誰も置き去りにしない」という言葉を実現するための国連の「持続可能な開発目標」は、気候変動やエネルギー、健康や雇用といった先進国でも深刻化している課題なども取り上げている。また、政府・自治体や各企業、大学、研究機関等のSDGsへの取り組みや活動状況も報告された。

総来場者は160,091名以上である。



国連SDGsの17の目標とそのターゲットアイコン

*1 SDGsは「Sustainable Development Goals」の略称。最後がGoals(ゴールズ)だから、読み方は「エス・ディー・シーズ」となる。

「SDGsへの日本の取り組み状態」に絞って報告

1) 各国の各SDGsの2017年進捗の概略

A・グテーレス国連事務総長は'17/6、国連持続可能な開発目標(SDGs)2017年度進捗レポート「2017SDG progress report」を発表した。(Sustainable Japan '17/6/27)

2) 日本への評価 (⑩表参照)

157カ国中1位がスウェーデン、上位にはデンマークなど北欧諸国が名を連ね、日本は11位だった。英は16位、米は42位、東アジアでは韓国が31位、中国が71位だった。

日本の評価内容は、SDG4教育やSDG8働きがいと経済成長、SDG9インフラ構築と持続可能な産業、技術革新に関しては高く評価された。

SDG1	貧困	○	SDG10	不平等	▲
2	飢餓	○	11	都市・地域社会	○
3	健康・ウェルビーイング	○	12	責任ある消費・生産	■
4	教育	◎	13	気候変動	■
5	男女平等	■	14	海洋生物	▲
6	水・衛生	○	15	陸上生物	■
7	再生可能エネルギー	▲	16	平和・正義	○
8	雇用・賃金・経済成長	◎	17	パートナーシップ	■
9	産業・イノベーション・インフラ	◎			

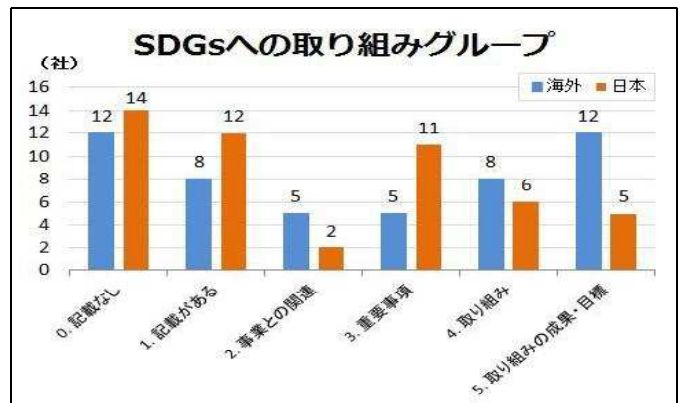
◎：評価が高く、○、▲、■の順番に評価が低くなる

しかしSDG5平等では、特に女性国会議員の比率の低さと男女の賃金格差、SDG12持続可能な生産と消費では、電子廃棄物の排出量と食品輸入に伴う活性窒素の輸入量、SDG13気候変動への取り組みでは、エネルギー関連のCO2排出量や車道を走らないモビリティの実効炭素税率で、SDG15陸上生物、SDG17グローバル・パートナーシップでは評価が低く課題が残る。(サステナブル・ブランド ジャパン)

3) 各企業の進捗状況…日本企業、海外 (⑪図参照)

企業の取り組みグループ分類結果である。これを見ると日本企業は海外の先進企業に比べると、「言及のみ」「重要項目としての認識」が多く、事業との関連性や具体的な取り組み、成果や目標といったところへの踏み込みが少ない傾向がわかる。

グループ0を0点、グループ5を5点として点数化し平均点を比較すると日本企業が1.96点に対し、海外企業が2.5点と、日本企業よりも海外企業のほうがレベル感の高い取り組みが多いことがわかる。(JFS ニュースレターNo.175 2017年3月号)



4) SDGs評価の影響

投資の際に環境・社会・ガバナンス(企業統治)といった非財務情報を考慮する「ESG投資(*2)」が世界的に拡大している。現在、全世界の資産運用残高の内約3割がESG投資だといわれており、特に欧州では約6割を占めるほど盛んになっている。

日本ではまだほんのわずかだが、厚生年金と国民年金の積立金約130兆円を運用する世界最大の年金基金GPIF(*3)が国連責任投資原則(*4)に署名、ESG投資に乗り出しつつあり、今後日本でのESG投資の割合も大きくなっていくと考えられ、企業のSDGsへの取り組み如何が影響するものと思われる。(サステナブル・ブランド ジャパン)

*2 環境/Environment、社会/Social、企業統治/Governanceに配慮している企業を重視・選別して行う投資。(環境については二酸化炭素の排出量削減や化学物質の管理、社会では人権問題への対応や地域社会での貢献活動)

*3 「世界の年金基金ランキング」トップ300のうち運用資産が最も多いのは、日本の年金積立金管理運用独立行政法人である

*4 投資家として環境、社会、企業統治に関して責任ある投資行動をとることを宣言するもので、'06年に国連が公表した6つの原則。

(渡部 敏郎)

2018
田んぼの学校

第2回「稲刈り・ハサかけ」

実るほど
頭を垂れる
稲穂かな

くたわわに実った、黄金色の稲穂>



田んぼの学校の幟



農工大のお姉さんと一緒に稲刈り



参加者119人がさわやかな汗を流す

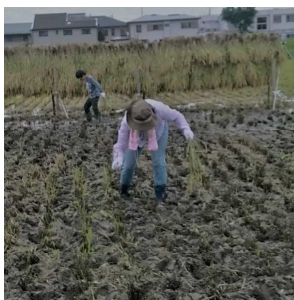
9月23日(日)東京農工大学本町農場の水田で、第2回田んぼの学校を開催しました。当日は秋の薄曇りながら時々日差しが出る好天に恵まれました。

参加者は生徒39人、生徒の家族(両親兄弟など)50人、当会スタッフ15人、農工大学生(耕地の会)13人、市職員2人の計119人で、朝9時から12時前までさわやかな汗を流しました。



稲刈りは18m×15mの水田の稲を、生徒が1株ずつカマで手刈りする、昔ながらの方法で行ないました。生徒が刈った稲は、後ろに待っている親に手渡しし、4株ずつひもで結んでハサかけチームに渡します。ハサかけ作業は、たんぼの脇に組み立てたハサ(稲架)に3段に架けていきます。

↑リレーでハサかけ
↓落穂も大切に



イクヒカリはコシヒカリのひ孫

前日まで雨が降っていたため、田んぼはかなりぬかるんでいました。2チームに分かれ各々30分ずつで稲刈りと、ハサかけを交替と想定していたのですが、全部で1時間半ほどかかりながら、大きなケガや体調不良もなく、無事に終えることができました。

気温は24℃～27℃と高め。各自水分は持参されていましたが、事務局が用意した2Lのペットボトル3本がほとんどなくなるほどでした。

今年の稲は、これまでのコシヒカリではなく、イクヒカリという品種です。イクヒカリは創られてからまだ10年あまりの、コシヒカリのひ孫にあたる品種だそうです。

イクヒカリの食感は、「おにぎりにしたときもねばりがあり、おいしさが失われない」などありました。稲刈り作業も、これまでのコシヒカリと比べて分けつ数(株の枝分かれ)はかなり多く、生徒の片手ではまとめられないほどでした。

刈り取った稲は、ハサかけ(稲架掛け)で天日干しにします。生えていたときの逆に、実を下にして、日の光と秋の風で自然乾燥させるものです。アミノ酸などが増え、うまみが増すと言われていますが、最近の農家の稲刈りはコンバインの機種により、稲刈りから脱穀まで、ほぼ同時に行われてしまうことも多いようです。

うれしそうな子どもたちの笑顔が印象的

稲刈りが進んだ田んぼでは、アマガエルやトウキョウダルマガエルが何匹も動いており、虫かごを持参した子どもたちが目を輝かせて、追いかけて、つかまえてはおかあさんから「飼えないんだから元にもどしてあげなさい!」と強く言われていました。

稲刈りは水田の中で行ないますが、田植えの時のように水を張った状況ではないため、水田皮膚炎については特別な対策はとる必要はありませんでした。うれしそうな子どもたちの笑顔が印象に残りました。なお、次の第3回目が最終回(10月7日)です。当日は脱穀(だっこく)・粃摺り(もみすり)、修了式を行います。

トウキョウダルマガエルとアマガエル



(小西 信生)